

「身延紀行」(翻刻)

東京桂の会

身延紀行

邦

佐竹義峯朝臣女

とし比かひの国身延山にまうてん事を明くれねかひつるに
ことしといへることし 心願成就しておもひよらすまうつ
る事に成ぬるなんいとありかたくうれしさいはんかた
なし 寛政元年水無月二日の曉に館を出立て 品川を過河
崎にてやすらひ その夜は神奈川にやとる 海のおもても
ちかうなかめらるゝ所にてめつらしうおほゆ あくれば
こゝを出るに ことさらにねきつる事あるゆへ 先鎌倉江
の嶋へまうてんとて 金沢にいたる その能見堂にのほ
りて一覽するに 名にしおふ八景など聞しにはまされり
やかてけふは金沢の町にやとり あくれば又こゝを出 あ
さひなの切とをしにかゝり 鎌倉に入て八まんぐうの御ま
へなる雪のしたの町にやとりしめて 先鶴が岡にまうつ
八幡宮にぬかつき 御ほうもちなとさまく拝し 御家の
武運長久をいのり奉り 神人にあつらへて御神楽をたてま
つる神つこ神子あまた出てもよほしおこなふ あつまには
めなれぬ事おほく かぐらのはうし心すみてたふとく

すゝなるまでおほえらるゝに

笛竹のしらへもすめる鶴か岡君を千とせといのる神垣
それよりやとりに帰て 二夜をこゝにあかす 此ほととこ
ろくくのふるき跡をみるに めつらしき事おほかり 三日
といふあした こゝを出て江の嶋のかたへむかふ 道の打
あはせ波の船わたしなと昔にはひきかへ たひらかなるま
さこ地に成ぬるもいと心やすく過て 片瀬滝口寺へまうて
やかて江の嶋にいたる やとりにしはしやすらひつゝ 弁
財天へ詣ておかみまいらす

す

上下の宮本宮岩屋などおかみめぐりて さてこゝをかへり
出て こよひは藤沢にやとり あくれば相模川をわたり
けはひ坂を過 大磯の宿にやすみ 鴨立沢などを見て
酒匂川をわたり 小田原にやとる 箱根山ちかう見えて此
夜月さへ晴たるに 旅の詠いとめつらしくて

け

はこねちのふもとの里の旅枕かたしく袖にやとる月か
あくる日箱根をこゆ 女の旅はこゝの関にて老女出てあら
ためことをすなと おほやけの掟何となう心あらたまりて
おほゆ

昔より関の戸さしの箱根山みちはさはらすこゆるたひ

人

こよひは峠にやとり あくれば山をくたり 三嶋にてやす
らひ 沼津にやとりとる あくる日出立ぬれと よひより
雨降たるに 富士川わたりとまりぬといへは よし原に
やとる 夜あけて富士川わたるよしを聞て こゝを出行て
船にて川をわたる 水たきり早瀬なれとも滞なくこえて
松野といふ所にてやすみ 身延のかたへおもむく 右もひ
たりも木生しけりて けはしき山つゝき 又は河原真砂地
なとあまた過るゆへ 道を行かねて日くれぬれば 松の火
をとまさせて過つゝ やうくまんさはにいたりて やと
りをとる あくる日はふくし河をわたり 南部にてやすら
ひ それより大城川をわたり 山の中をのみゆくに鶯の啼
を聞て

山ふかき森のうくひすことなく聞もめつらし水無月
のころ

はるくの山河をつゝかなくこえきつる事 誠に祖師の御
加護によれるなんだふとし 身延にいたり着たれば 宿坊
より僧のむかへに出たるありて みちひかれ惣門に入 そ
れよりみのふの町をしはし過て 坂のうへなる山本坊大翁
院へいさなひ入 此御山は十三里四方ありといへり 貫主
上人よりもやかて使僧を給ひぬ こゝに來ぬれば 経題目
をとなふる声をのみ耳にふるゝ事 たふとさいふはかりな

し こよひは空もよく晴たるに 庭の竹のしけみより月の
いつるを見て

りて

あくればとくもよほし出つゝ 御山へまうつ 先対面所に
行てしはらくやすらひ 経堂へまうつれば貫主こゝまで出
むかへ給ひて 書院へいさなはれ み物かたり聞え給ふ
さて山本坊しるへしてところくをおかます 祖師堂へま
うてふしおかみつゝ見たせは いとひろらかにして莊
嚴結構をつくせり けふは千部のときやう夕座待ほとにて
貫主説法あるを聴聞す 説法はてゝ後 祖師の開帳あるに
我と具したる領解尼とはゆるされて したしくすみたんに
のほりてまちかく拝し奉るに たふとさいはんかたなく覺
えて心におもひつゝけぬ

く

それより御骨堂へ参る 此みたうは昔祖師の朝暮住せ給ふ
所ゆへ 御骨をまかく納られたり 此山にてはわきてたふ
とき御堂なりと するへの僧かたり聞ゆ いみしき玉の宮
殿に御骨のいらせ給ふをおかみ奉るに たふとさ言葉にの
へかたくて涙とゝめあへす 誠に限なきわか身の罪も打は
らふ心地して拝しぬ

妙なりし法につもりしつみきえてうき世のちりをはらふ山かせ

それより古仏堂 位牌堂にまうつ こなたより納奉りし御位牌ともを拝し 国々より納ある惣位はいたう 其外ところくおかみはてゝ宿坊へかへりぬ つくの日は千部の施主に人しゆへ また御山へまうてゝ読經にあひて帰る そのあくる日は七面山へまうてんとおもひしに 夜中より雨ふりて 道霧あひてまうてかたきよしをいへは けふも御山へまうてゝ 千部供養をおかみてかへる あくれば雨も晴ぬるゆへ 七面山へのほる 此御山は名たゝる高山にて身延よりは三里五十町 九十六まかりの山路なるを事なくのほりて 七面大明神を拝し 赤沢といふ所にやとる あくる日こゝを出て かへりくたる道なれば 奥の院へまうてゝかへる 七面山下向の道のなかにはより雨ふり出しか晴まなくて 大城川なとゆきゝとまりけるゆへ 宿坊に逗留して川のわたりをまつ こゝに九日までありて 川のわたりゆきゝするときは 宿坊をわかれていとまをつけ かへるさにおもむく さて四十八瀬の川々をこえて 沖津に出て こゝにやとりをとる 世に聞えたる清見寺見に行たれば 僧出てしるへして 書院をはしめところくを見す庭に出て 台のうへより海を見わたす景色おもしろし 清見かた関路をかけて見わたせばよせてはかへる沖津

その夜は興津にやとり あくればおきつ河をわたりさつた山をこゆ たうけに台あり こゝにやすらひてみるに此所は東海道第一のけしきと皆人のいへるもことばりにて ふしのね 田子の浦かけて駿府の海を見わたし 塩やくあまのしほくむわさなと 系にもをよひかたきありさまをなかめて

名にしおふ富士の高ねや田子のうらの塩くむあまに袖もぬれぬる

こよひは沼津にやとる さて箱根にて塔の沢を見めぐり湯本にやとりとりて出湯あみて 三夜までこゝに逗留して立いて さかは河をわたり 大磯にやとり あくる日は川崎にやとりて うるう月のみなつきの三日になん江戸へかへりつきぬ

此たひみつからおもひ立て神まうての旅行せしか 日ころ和歌の道に心あらは おもしろきこと葉も詠し出ぬへけれと 此道にうとき事にしあれば さる事もせず 道の記といふにはあらねと 只みしまゝのこしおれをわらひ草にしるす事ともになん

しらなみ

是より駿河へ行て 府中にやとる ほとちかければ 富士浅見のみやしろへまうてぬ やとりしあるしのしるへにてつくの日は久能山へまうつ 駿府よりは麓まで三里 下馬より山上までは八町ありとぞ 十七まかりつゝらおりの坂をのほり 又御宮までは六七段の石坂いつゝまであり 誠にるりをのへ かねをかざりたる宮つくり 筆にものへかたく押し奉る 此君の御恵にて世中おさまりし有かたさをおもひつゝけて

みやしろのゐらかならへし此神のおさめし御代の恵かしこぎ

かへるさには三穂の松原を見る 落葉かくわらはへのむれるもめつらしうなん 三穂の明神へまうて海辺にある羽衣の松をみる いにしへの事なとおもひ出て

ぬきかけし天津をとめの羽衣の松もときは色そかはらぬ

こゝを過て三穂と江尻とのあひたの村を過しに しはし乗物をすへて見わたせば むかひに富士の山ちかく 山のすそ野をは三穂の松原のめぐりたるけしき まことに系にかきたるにたかはすおもはるれば

系にかきし富士のしら雪とけやらぬすそ野につゝくみほの松はら

『片玉集』の中の女の史料

— 本清院寿子と「身延紀行」 —

作者について

本作品は、『片玉集』前集巻六十三に収められている。冒頭に編者である津村涼庵正恭（一七三六—一八〇六）が、その作者を「邦 佐竹義峯朝臣女」と記していたため、本誌第十三号の拙稿『片玉集』の中の女の史料についてで、その作者を「邦 佐竹義峯女」とし、「邦は享保十四年（一七二九）十二月十五日生まれ。名は猶子。宝暦元年（一七五二）に佐竹義明に嫁ぐ」としたが、これは誤りであった。「邦」というのは、作者ではなく、『甲子夜話』の著者である松浦静山（一七六〇—一八四二）の伯父松浦邦のことである。静山は平戸六万石の藩主松浦清の隠居後の号である。邦は静山の先代藩主誠信の嫡子で、本来なら後を継いで平戸藩主になるはずであったが、若くして亡くなったために藩主の座が松浦清（後の静山）へ回ってきた。佐竹家の系図中に佐竹義峯の四女、松浦邦に嫁いだ寿子という女性を確認できる。涼庵は「寿子 松浦邦室 佐竹義峯女」

倉本京子

と書くべきだったのである。何かの具合で書き落としたのであるう。お詫びして訂正しておく。

つまり「身延紀行」の作者は、平戸六万石の嫡子松浦邦の正室で、秋田二十万石の佐竹義峯の息女であった寿子という女性であることが判明する。佐竹家の江戸藩邸の記録である『御亀鑑』江府編には、寛政元年（一七八九）閏六月三日に、「本清院様身延并鎌倉八幡 御参詣相済今日御機嫌能遊御帰着候」という記述がある。まさしく本清院寿子の身延参詣を裏付ける史料と言えよう。

寿子の生涯

『片玉集』続集巻四十一の「佐竹家譜」によれば、享保十九年（一七三四）六月十一日に秋田で生まれた。法名は本清院である。先述の猶子は同腹の姉である。

寿子こと本清院について、二十六歳違いの松浦静山が『甲子夜話』続篇六十六に、静山自身の記憶や人から聞いた話などを優しく美しかった伯母の思い出話として、親愛の情をこめて書いている。静山自身「これ清が親しく見る所なり」として、「本清院殿は、容色美く、御こゝろ優に正しく坐しき」と語っている。

延享元年（一七四四）、寿子は十一歳の時に秋田より出府する。同三年、十三歳の時に正式な縁組が整う。婚儀は宝

暦元年（一七五二）、寿子十八歳、邦二十歳の時であった。夫婦仲はとても睦まじく、同五年に長姫を出産する。大家の姫君にもかかわらず傲慢な所は見せず、夫のキセルにタバコを詰めるのは常に寿子であったとその昔仕えていた老女が語っている。

そんな幸せな時期は長くは続かなかった。宝暦七年（一七五七）の春、三歳の長姫が突然この世を去る。さらに夫邦もまた病の床についてしまう。老女を従え、夜半過ぎまでも付き添うという寿子の必死の看病の甲斐もなく、五月四日、邦は二十六歳の若さで長姫の後を追うかのように逝ってしまう。わずか二十四歳で寿子は後室になってしまったのである。寿子の結婚生活はわずか六年足らずであった。

邦亡き後、佐竹家は寿子の再婚をも念頭に置き、翌八年に実家へ戻す。が、寿子の思いは別の所にあった。髪に装飾を付けることをやめ、島田くずしに結び続けた。宝暦八年（一七五八）には自ら髪を切り、再婚の意志がないことを示して、本清院と称するようになる。二十六歳の時のことである。

明和六年（一七六九）の十三回忌には、自らの財を投じて、天祥寺にある邦の墓に上屋を造らせている。さらに天明元年（一七八一）の二十五回忌、本清院四十八歳の時に

は、金百両を邦の御墓御上屋修繕料として天祥寺に寄附している。同四年（一七八四）の二十八回忌には髪を剃り、その剃髪の式を執り行っている。そして寛政元年（一七八九）の三十三回忌には、先年剃り落とした自らの髪を邦の墓に納めて合葬の礼をし、墓表に自らの法号を邦の隣に刻んだのである。本清院五十六歳のことである。「実家に戻った身としては、自分は佐竹家の墓に葬られるのは仕方ないこと。これは本意であるが、本意ではない。だからこそ自らの髪を納めたのである。体はそこにあっても、魂は天祥寺にあるので、墓参りをするなら、我が夫の墓のある天祥寺に来て欲しい。我が心はそこにこそある」と静山自身も聞かされていたのである。

本清院は側近くに仕える者に、自分の臨終は苦しむことなく往生したいと日頃語っていたが、その言葉通り寛政十年（一七九八）十一月十三日の夜、にわかの中風で眠るようにその一生を終える。六十五歳であった。その亡骸は佐竹家の菩提寺である総泉寺に葬られる。本清院が亡くなった時、静山は参勤交代で国元にいた。出府した後、総泉寺の墓所へ参った静山は驚く。唐風の佐竹家の墓所にあつて、本清院の墓だけがその趣を異にしていた。なんと天祥寺の墓制に倣ったものであったのだ。静山は生前の本清院の言葉を思い出し、変わることはない邦への思慕に思わず涙す

る。僧によれば、本清院の遺言であったとのこと。しかもその理由は、佐竹風の墓は見えた目が見苦しいので、もっと清らかなものしたいということであった。本当のことは心の内に秘めていたのである。静山は、本清院のその心遣いとその一途な思いにまたも涙するのである。

文化三年（一八〇六）、邦の五十回忌の天祥寺での法事で、静山は一人の見知らぬ女性と会う。その人は、「その昔、本清院に仕えていた時、五十回忌には自分は生きていないだろうから、ぜひかわりに追善をしてほしいと頼まれた」と語り、かつて仕えていた仲間とともに参詣したとのこと。本清院の死してなお邦への絶ちがたい思慕に、静山は返す言葉もなく涙するのであった。

天祥寺は肥前平戸藩松浦家墓所として、墨田区登録史跡に指定されているが、現在確認できるのは初代鎮信と九代清こと静山夫妻のみで、邦の墓は確認できない。本清院が三十三年の時を重ねてやつとの思いで刻み入れた自らの法号を見ることができないのは本当に残念である。

若くして夫や娘に先立たれた後、ひたすらその思いを夫に向け、貞節をつらぬいた本清院ではあったが、静山から見れば「夫人はかゝる貞操なる御質なるに、また豪華なる気象も坐はして、時としては北里（新吉原町を云う）に遊び、春は桜花の賞、秋は燈籠の観を為し給ひ」ながらの、

人々が寄り添う華やかなものであった。幼い静山にとつては、屋敷に遊びに来るたびに山のようなお土産を持つてきてくれる優しい伯母だったのである。だんだん佐竹家が儉約になつてその量も減つていったと静山は少々不満げに書き遺している。放蕩の日々に浮き名を流したこともある若き静山に対しては、若い時は遊観もしたほうがいいとおおらかに見守り、酒宴に度々招いてくれたという。

剃髪後は僧衣を着るのが普通であつたが、本清院は普通の羽織を着し、時には黒い頭巾をかぶることもあつた。そして、自らをナマガサ坊主と称して魚肉も拒まず、もてなしの膳を賞味していた。まさに本清院にとつては、剃髪も仏に仕えることを意味するのではなく、亡き夫邦への貞節の誓いを意味していたのだろうか。

そういう意味で、本清院は夫亡き後、多方面にその才を発揮している。和歌は冷泉家に学び、詠草も多かつたというし、香道も奥を極め、側近くに仕える者に教えるまでになり、さらに茶道は千家を旨として、浅草の屋敷に茶室まで造らせている。晩年には書道も嗜み、その筋はなかなかのものであつた。

『片玉集』続集巻十一に「詠千首和歌」として、本清院の和歌が千首ある。今回改めて『片玉集』を見直すことで見つけることができた。本誌第十三号の前掲拙稿には、こ

の史料を収録することができなかったので、改めて追加したい。

春二百首

立春日

天てらす神路の山を出る日の影ものとききはるは来にけり

立春風

のとけしな春たちそめて花の香も木末の風のいつさそはまし

(中略)

此千首歌はさたまりたる題にもあらされとよみならひのために詠せし事なりこれもまた冷泉家のなかれをくめる津村正恭のあさからぬをしへをおもひつゝけて

言の葉のかすならねとも敷島のみちのをしへにならふかしこさ

寿子

右寿子と聞えまいらするは、故右京太夫佐竹義峯朝臣の息女、松浦壱岐守邦朝臣の室にて、寛政十年霜月十三日かくれ給ひぬ、御歳六十五と聞ゆ、法号は本清院浄蓮妙相大師と云々、かすくゝにみかける露の玉をきて消にし君よいかに

正恭

はかなき

冒頭の二首と最後の奥書である。筆者は和歌はまったく不案内で、この作品の善し悪しはわからないため、東京桂の会の古屋祥子さんにその一部を読んでいただいた。世間並みではなく、むしろ非常によくできた和歌といえ、折々の難しい題をよく詠みこなした格調高い作品であるということ、と同時に本清院の教養と、何よりも涼庵の指導力の高さに感心させられるそうだ。作品の成立時期については不明であるが、みずみずしい若々しさを感ぜさせてくれるようである。

「身延紀行」について

日蓮宗の総本山、身延山久遠寺(山梨県南巨摩郡身延町)は、日蓮を開山の祖として古くから多くの信仰を集めている。本清院は忌日も祖師(日蓮上人)と同じだったと残された人々が語り合うくらい厚く法華を崇敬していた。心願成就を果たした寛政元年(一七八九)五月四日の亡き夫の三十三回忌を終えて、六月二日早朝の旅立ちである。途中鎌倉、江の島に寄りながら箱根の関を越え、富士川を越えた所の岩淵から東海道をはずれて身延をめざす。岩淵から内房・万沢南部を経て身延山まで十二里の行程である。途中、ほぼ真ん中の万沢で一泊する。江戸方面からの一般的なルートである。万沢には幕府の口留番所が置かれていた。

箱根の関所を通る時は、「女の旅はこゝの関にて老女出てあらためことをすなとおほやけの掟何となう心あらたまりておほゆ」という感想を述べているが、ここに関する記述は見当たらない。

万沢を出、南部で休む。南部より身延の総門まで三里、総門までは宿坊の僧が迎えに来ていた。総門より三門までは約一・五*の門前町が続く。

江戸中期以降多くの参詣客が集まつた身延山には多くの宿坊があるが、本清院は山本坊という宿坊に泊まっている。山本坊は、徳川家康の側室お万の方(七面山女人踏み分けの祖、水戸光圀の祖母)や、徳川御三家の身延宿泊所だった所で、今も宿坊として続いている。久遠寺は何度かの火事に見舞われ、特に文政四年(一八二二)には伽藍焼失、その後復興するも、また明治八年(一八七五)にも本堂や諸堂、宿坊など七十五棟を焼失したため、山本坊でも古い記録はほとんど残っていない。そのため、残念ながら本清院が身延を訪れたという記録もないようだ。久遠寺の本清院の第一印象は「こゝに来ぬれば経題目をとふる声をのみ耳にふるゝ事たふとさいふはかりなし」であるが、この雰囲気は今に続いているというのが、実際に身延を訪れた筆者の感想でもある。

貫首上人に対面し、経堂、書院、祖師堂、御骨堂など諸

堂を巡り、説法を聞く。比較的淡々と書き綴られているこの作品の中で、久遠寺の部分だけは趣を異にしている。「たふとさ言葉にのへかたくて涙とゝめあへず、誠に限りなきわが身の罪も打はらふ心地して拝しぬ」と、積年の思いを実現していささか興奮気味の本清院である。本清院はかつて自分が納めた位牌をも拝む。

雨が晴れるのを待つて七面山へ登る。身延山（一一五三）より西の方角の山を一つ越えた彼方にある標高一九八二の山で、先述のお万の方によって女人禁制が解かれている。三里五十丁九十六まがり」の山道を駕籠があるとはいえ、五十六歳の本清院が登るということは相当な苦勞だっただろう。現在でもこのコースは中級以上の登山コースである。途中の宿坊で一泊して、帰りには下りということとで身延山の奥の院へも寄っている。現在は本堂横から奥の院へはロープウェイを利用してわずか七分、徒歩では上り二時間半の行程である。奥の院からも、七面山からも、天氣が良ければ見事な富士山が見えたはずであるが、その記述が見られない。あいにくの天氣だったのだろう。

当時、太平洋側からの身延山参詣の往路は徒歩、帰路は富士川の舟運下りというのが一般的であった。本清院一行も、雨のためにしばらく山本坊に逗留して舟の運行を待つ。舟で岩淵まで下るのが江戸への近道であるが、途中で舟を

降り、万沢から沖津へ出る。これは京上方面からの一般的なルートである。途中「四十八瀬」という難所の川越もあったが、一日で沖津まで出る。翌日清見寺に参詣し、府中まで足を伸ばす。わざわざ遠回りしたのは久能山への参詣のためであった。ここでは太平の世のありがたさを綴っている。

やつと天氣に恵まれたのか、三保と江尻の間でわざわざ駕籠を止めて富士の景色を満喫している。本清院はほとんど駕籠で移動したようで、旅の途中でふと目にする風景、光景の描写はなく、訪れた場所から見える風景に限られているのは、この作品の特徴である。庶民の足で歩く旅で書かれた旅日記との大きな違いであろう。

本清院の旅も終盤になる。東海道を下り、箱根では塔ノ沢を見物し、湯本で三泊して温泉につかる。一ヶ月にも及ぶ旅の疲れもここで癒すことができただろう。大磯、川崎に一泊ずつして閏六月三日に江戸に帰ってくる。三十二日間の旅であった。

〔参考文献〕

- 「甲子夜話統編六十六」
 「甲子夜話統編6」東洋文庫 平凡社 一九八〇年
 「御亀鑑」秋田県教育委員会編 一九八八年
 「新編佐竹氏系図」原武男編 加賀谷書店 一九七三年

- 「佐竹家譜」原武男編 東洋書院 一九八九年
 「国典類抄」秋田県教育委員会編 一九八七年
 「富沢町誌」富沢町誌編さん委員会編 二〇〇二年
 「殿様と鼠小僧」氏家幹人 中公新書 一九九一年
 「津村淙庵」

- 「森銃三著作集」第七巻 中央公論社 一九七一年
 「寛政重修諸家譜」続群書類従完成会

一九六四～一九六六年

追記

本誌第十三号の前掲拙稿の中で、その編者である津村淙庵正恭の「正恭」の読み方について、筆者は「まさやす」とふりがなをつけた。その後翻刻作業を進めていく過程で、大田南畝が筆写した『三十幅』の「片玉集抄」の今井さよ著「無題」の中に、淙庵のことを「まさゆきのぬし」と書いたくだりを見つけたので、訂正して「津村淙庵正恭」とする。お詫びして訂正しておく。

この「片玉集抄」は、大田南畝が淙庵から『片玉集』一卷を借りて筆写したという奥書があるが、現存する『片玉集』の中にはこの「片玉集抄」に相当する部分が見当たらない。なぜ本家本元の宮内庁書陵部蔵の自筆本にこの部分が欠けているのかは、「片玉集抄」を読みすすめていくなか

での疑問であった。が、その謎の糸口らしいものを見つけたことができた。前集巻六十六の冒頭には「片玉集 六十六下」と記されているが、『国書総目録』には前集六十六巻としてこの「六十六下」だけが収録されている。ということは、「六十六上」なるものが別に存在することになる。どこかへ消えてしまった「六十六上」をこの「片玉集抄」の部分だとは考えられないだろうか。淙庵は『片玉集』続集の跋文の中で、各巻は「紙五十張」に限ると述べている。「片玉集抄」は紙数五十枚、「六十六下」は三十六枚であり、「下」が五十枚に足らずともおかしくはない。南畝に貸した「六十六上」が返却された際に、淙庵が元の場所に戻すことなく、そのまま散逸してしまったのではないだろうか。あるいは何かの事情で南畝から返却されなかった可能性もあるだろう。あくまで筆者の推量の域を出ないが、ありえないことではないように思える。が、これ以上は筆者の手には負えない。ご教示をいただければ幸いである。

神奈川県横浜市都筑区茅ヶ崎南

TEL・FAX 〇四五一九四四―三三三八
 四―一四一―一四〇二